

# 心と言葉のグローバル日本語文法

日本語で認識し、思考し、表現するとは  
どういうことか

SAMPLE

成瀬由紀雄

## 目次

はじめに .....	3
【要約】 .....	3
第 1 部 日本語と文法 .....	6
【要約】 .....	6
文法とは .....	7
英文法の歴史 .....	7
国文法の歴史 .....	8
現代日本語三脚論 .....	11
第 2 部 心と言葉のグローバル日本語文法 .....	14
1 章 日本語文の三層構造 .....	15
【要約】 .....	15
1. 命題、対事的モダリティ、対人的モダリティ .....	15
2. 表現の多機能性——ひとつの表現が複数の機能を併せ持つ .....	16
3. 日本語文の分析 .....	20
2 章 日本語の文の 3 つの構造 ——和・漢・洋 .....	39
【要約】 .....	39

# はじめに

## 【要約】

---

- 私たちは日本語の文法を知らなければならない。日本語がどのような言語なのかを知ることは、日本人が日本人として自分自身の姿を知ることにほかならない。自分自身を正しく知らないかぎり、他者を正しく知ることはできない。
- 日本人は日本語の文法について学校でなにも習っていない。たとえ国文法をマスターしたからといって日本語の世界の本質を理解することはできない
- 文章の書き方についても私たちは学校でなにも習っていない。
- 必要なのは何物にも囚われずに日本語の姿を正面から見つめ直すことである。

☆☆☆

### 私たちは日本語の文法を知らなければならない

ふつうの日本人にとって日本語の「文法」は縁遠い存在である。日本語の文法などなにも知らなくても日常生活でなにも困らないからである。私たちがふだんの生活で文法を意識する場面などほとんどない。読み書きの際にも辞書のお世話にはなっても文法のお世話にはならない。そんなものを知らなくとも私たち日本人は日本語の文章を読めて書ける、と誰もが思っている。

だが、私たちは本当に日本語の文法など知らなくてもよいのだろうか。そうではない。日本語がどのような言語なのかを知ることは、日本人が日本人として自分自身の姿を知ることにほかならない。そして自分自身を正しく知らないかぎり、他者を正しく知ることはできない。私たちは日本語の文法を知らなければならない。

### 私たちは日本語の文法を習っていない

そもそも日本人は日本語の文法について学校でなにも習っていない。次に紹介する詩人の富岡多恵子氏は学校で文章の書き方をなにも習わなかったと述べているが、文章の書き方以前に私たちは日本語という言葉について学校でなにも教えてもらっていないのだ。

なお学校で教えられている（ことになっている）近代日本語の文法（国文法）についてはそれが単なる英文法の翻訳版であることは本編で詳しく述べたとおりである。したがってたとえそれをマスターしたからといって日本語の世界の本質を理解することはできない。

### 私たちは文章の書き方を習っていない

文章の書き方についても私たちは学校でなにも習っていない。長い引用になるが次の文を読んでいただきたい。

同じく最近目にふれた文章で記憶に残っているのが富岡多恵子氏の「書き方」（毎日新聞社『言葉の不幸』所収）である。

富岡氏は、小学校、中学校、高等学校で、文章の書き方の基礎は「なんにも習わなかった」と、学校の国語の先生がきいたら腰を抜かすようなことを書いている。作文の時間はあったが、「しかし、今思いかえてみると、作文の上手下手の判断は、幼いながらもその内容、即ち、作文の書き方の特異な観察力や、個性的なものの見方や感覚の上にあっていたように思えてならない」

「作文の良し悪しは、どちらかというのできばえは情緒的、文学的な判断で行われ、科学的な根拠はないように思えた。そして、その中学生が世間へ出た時、名文家の文章というのはあっても、正確で上手な日本語の文章というのは、なかなか見つからず、手本もないのであった」

とも言う。これには虚をつかれる思いがした。

われわれはお互いに行えることなら上手に書きたいと思っている。学校の生徒だけではない。大人だってそうだ。ところが、正確に書きたいと思っているかどうかはかなり疑問である。不正確でいいかと問いつめられれば、否、であるけれども、たとえ正確でも下手ならしかたないと日頃は考えている。「急に止まれない」のか「急には止まれない」のか、どちらかが誤っているのだと言われると胸騒ぎを覚える。

富岡氏は、さらにこう言う。

「もしわたしが今中学生ならば、『朝七時に起きて歯をみがいて食事をした』、ということ、正確に書き記す日本語を作文の時間に教わりたいと思っている」

そして、同じ内容をあらかず五通りの書き分けをしてみせる。

——朝、わたしは七時に起きて、それから歯をみがき、朝食をした。

——朝七時に起き、歯をみがき朝食をした。

——わたしは朝七時に起きて、歯をみがき、そして朝食をとった。

——朝、七時に起きた。歯をみがいた。それから朝食をとった。

——朝の七時に起きて歯をみがき、朝ごはんを食べた。

「このうちのどれがもっとも日本語として正確に内容をあらわしているのか、どれがもっとも現代の日本語らしい日本語なのか、わたしには今もってわからない」「はっきりいえば、『朝、七時に』と『朝七時に』とはちがうし、『朝の七時に』ともちがうことを、わたしは教えらえたことはなかった。句読点の打ち方も教わらなかった」

私も同じことで、そういうことを学校で習ったことはないが、それをはっきり意識していなかったから、こういう文章を読むと、ハツとする。

『日本の文章』（外山滋比古、講談社学術文庫、pp27-9）

### 文章に関する様々な「問い」に「心と言葉のグローバル日本語文法」は答える

富岡多恵子の『言葉の不幸』の刊行は1976年のことである。外山滋比古の『日本の文章』が刊行されたのは1984年のことである。そこからすでに半世紀近くがたつた。だがいまでも日本人は日本語の文法について文章の書き方について学校でなんにも習ってはいない。

富岡多恵子は日本語の文の書き分けの原理はどのようなものかと問う。外山滋比古は「急に止まれない」と「急には止まれない」の違いは何かと問う。

日本語の文章を書く際に必然的に生じてくるこうした問いに対して「心と言葉のグローバル日本語文法」は明快な答えを提供する。

### **必要なのは何物にも囚われずに日本語の姿を正面から見つめ直すこと**

英語によるグローバルな情報支配が進むなかで知的日本語の世界がいま危機に瀕している。このままでは日本語人が日本語で深く考えて日本語で適切に表現するという日本語人として最も大切な基盤が失われてしまう可能性がある。これは日本語人が日本語人ではなくなるということである。

大学教育では「グローバル化」を旗印に教育言語を日本語から英語に切り替える動きが進んでいる。その一方で「英語はいらない」との反発の声も一部から聞こえてくる。どちらも賢明な考えとはいえない。私たちが選ぶべき選択肢は日本語か英語かという二者択一ではなく、日本語の世界と英語の世界を過不足なく行き来できる能力を習得することである。本当の意味でのグローバルになることこそ日本人が日本人として世界で活躍するための必要条件である。

そのためにもまず必要なのはまず何物にも囚われずに日本語の姿を正面から見つめ直すことである。これまでのように西洋メガネをかけて日本語を見ることはせず、かといって過去に安易に寄りかかることもなく、いまここにある日本語の姿をありのままに見つめ、それを改善していく努力を重ねることである。その作業なくして日本語の知的世界を生存させ、よりよいものにしていくことはできない。「心と言葉のグローバル日本語文法」では微力ながらもその道を進んだ。

本稿をつうじて皆さんが現代日本語に対する新しい見方とその利用の仕方を習得していただけることを願っている。

成瀬由紀雄

# 第 1 部 日本語と文法

## 【要約】

- 英文法の歴史——15、16 世紀ぐらいまで英語には「文法」と呼べるものはなかった。イギリスで英語の文法をつくらうという機運が高まったのは 16 世紀の終わり頃のことである。当時のイギリス人は自国語たる英語に対して強い劣等感を抱いており、その劣等感を克服するために、当時まだ貧弱であった語彙を増やし、独自の文法を確立しようとした。
- さまざまな試行錯誤ののち英文法が完成期を迎えたのは、1795 年に発刊された Lindley Murray の English Grammar に至ったこととされている。それから約 200 年の長きにわたってイギリスやアメリカの人々は Murray が完成させた英文法を使って英語の体系を理解し、学習してきた。
- 日本語文法の歴史——史上初の日本語文法書はイエズス会宣教師のジョアン・ロドリゲスの『日本語文典』（1604-08 年ごろ）とされている。その後、江戸時代後期に富士谷成章、本居宣長、本居春庭、鈴木胤など日本語人の文法学者が生まれた。
- 近代日本初の日本語文法は「大槻文法」である。大槻文彦は文部省からの委託を受けて、日本初の国語辞典『言海』をつくりあげた。その巻頭部分としてつくられた「語法指南」が 1897 年（明治 30 年）に『広日本文典』として独立して出版された。これが近代日本初の「公的」日本語文法書である。その後、「大槻文法」は「国文法」と呼ばれて国民教育の普及とともに急速にその影響力をしていった。
- 「国文法」は、小国日本が欧米列強に一刻でもはやく追いつくために英文法を参考にして急ごしらえでつくりあげたものであったために、当然ながら本家本元である英文法の影響を強く受けることとなった。こうして日本語の実態を反映していない文法概念が学校国文法のなかに数多く盛り込まれることになった。
- 1970 年代ごろになると、明治以降の伝統の流れをくむ学校国文法が持つ矛盾点を指摘する声が徐々に高まってきた。その中心のひとつとなったのは、外国人に日本語を教える日本語教師たちであった。こうして新しいかたちの日本語の文法が「官」（国家）とは離れたところで構築されていくようになった。このようにして構築された文法体系は、従来の官制の文法が「学校国文法」と呼ばれるのに対して、ただ「日本語文法」と呼ばれている。
- 日本語を樹木に例えると、二度たいへんな接ぎ木をされた樹木である。最初は 1500 年ほど前の中国語の接ぎ木であり、二度目は 200 年ほど前の西欧語に接ぎ木である。そうやって二度の歴史の激変期に大きな接ぎ木をして生き延びてきたものであるから、その格好はとても奇妙なものになってしまった。このサクラだかマツだかスギだかわからないかたちになった言語が、現代日本語である。そして日本語人の心情や思考とは、この数奇な運命を経てきた樹木の果実である。
- このように現代日本語は「和」「漢」「洋」の三脚があってこそ成り立っているのであって、そのうちの一脚でも欠けてしまうと現代日本語は現代日本語として成り立たなくなる。これが私の「現代日本語三脚論」である。現代日本語のように三脚によって支えられている複合言語は世界でほかに類をみないと私は考える。

☆☆☆

## 文法とは

---

### 学校国文法は英文法の翻訳版

私たちは中学や高校の国語の時間に日本語の文法を教わった。一般に「学校国文法」と呼ばれるものである。多くの人は覚えていないかも知れない。なにしろ退屈なものだったから。

この学校国文法に対して現在少なくない数の言語研究者のなかから「役に立たない」「従来の学校国文法はまちがいである」などといった主張がなされている。たとえば日本語文法の第一人者のひとりである北原保雄は、その著書のなかで次のように述べている。

明治以降の文法研究の流れは、大きくいうと、大槻文法から橋本進吉に繋がる線が1つある。これは非常に形式的な、言語形式を重視する文法である。それに対して、言語の内容を見るというのが、松下大三郎、山田孝雄、それから時枝誠記の線である。

学校文法は橋本文法を基本とするが、それは橋本文法が単純でわかりやすいからだと思う。しかし、「～が」も「～は」も、さらに「～さえ」も「～こそ」でも、動作主体を表すものはすべて主語だという。これでは、何も見えてこない。文節についても、日本人なら文法を知らない者でも「ね」を入れて切ることができると言うが、それは、日本人であれば、日本語の意味がわかるからである。決して形式の方に繋がる必然性があるのではない。意味を無視して文法は語れないのである。

(『表現文法の方法』北原保雄、大修館書店、p.65)

学校で公式に教えられていることに対して数多くの専門家が異を唱える——まさしく異常な出来事だといわざるを得ない。

じつは、明治以来日本の学校で教えられてきた学校国文法とは英文法の影響をきわめて強く受けた、非常に乱暴にいつてしまえば英文法の翻訳版とでもいえるものであった<sup>1</sup>。

明治30年代の中盤(西暦1900年前後)、大槻文彦という言語学者が中心となって、わが国の学校国文法は最初の完成をみた。イギリスでの学校文法にあたるMurray文法の完成が1795年であるから、イギリスからはおよそ100年の遅れである。ちなみに大槻文彦は、あの蘭学の入門書『蘭学階梯』を著した蘭学者、大槻玄沢の孫である。

## 英文法の歴史

---

日本語の文法を考へてみる前に、まず英文法の歴史について少し眺めてみることにしよう。すると、いま私たちが学校で習っている英文法のもととなった文法が、じつはイギリス人の英語に対する劣等感を克服するためにつくられたものであることがわかってくる。

---

1 そのほかに漢文の文法からも影響を受けている。

15、16 世紀ぐらいまで英語には「文法」と呼べるものはなかった。皆さんのなかには、「文法」というものは大昔から自然に存在するもののように考えている方もいるかも知れないが、そんなことはない。英語にしても日本語にしても、人々はずいぶんと昔からそれぞれの言語を使っているが、みずからの言語を体系化しよう（これが文法である）と考えはじめたのは、それほど古い時代のことではない。ヨーロッパでは宗教改革の頃から、日本では江戸時代後期になってからのことである。

イギリスで英語の文法をつくらうという機運が高まったのは、16 世紀の終わり頃のことである。当時のイギリス人は、自国語たる英語に対して強い劣等感を抱いており、その劣等感を克服するために、当時まだ貧弱であった語彙を増やし、そして独自の文法を確立しようとした。その際のお手本となったのは、もちろん当時のヨーロッパ知識人の共通語たるラテン語の文法であった<sup>2</sup>。

その後、さまざまな試行錯誤ののち、英文法なるものがようやく完成期を迎えたのは、1795 年に発刊された Lindley Murray の *English Grammar* に至ったことだとされている。これは日本でいえば寛政年間、あの「鬼平犯科帳」の長谷川平蔵が江戸の町で大活躍していた頃にあたる。それから約 200 年の長きにわたってイギリスやアメリカの人々は、Murray が完成させたこの英文法を使って英語の体系を理解し、学習してきた。

Murray 英文法は、当時のイギリス国民がフランス語に対して抱いていた劣等感を克服するためにつくられたものであった。イギリスでは、1066 年のノルマンコンクエストから数百年にわたって支配階級がフランス語を用いていた。そして英語は下層階級が使う下等言語だという認識が一般的であった。その後のイギリスの世界制覇とともに英語は世界を席卷する言語となっていくのであるが、それ以前の英語はヨーロッパの片田舎の言語にすぎず、そのことに対して当時のイギリス人は大いに劣等感を持っていたのである。そうした劣等感が打ち払われて逆に傲慢な優越感へと変わっていくのは、シェイクスピアの出現にはじまって、最終的には Murray による英文法が完成に至ってからのことである。Murray 英文法の完成によってはじめて、英語という言葉はフランス語にも匹敵する高級文化言語としての地位を手にすることができたのである。

## 国文法の歴史

---

### 日本語文法研究の萌芽

ここからが日本語文法の歴史の話である。「文法」という明確なカタチではないにしても、日本人が日本語のことを外国語（漢文）とは異なる独自の言語であると無意識なりにも自覚し始めた時期は、おそらく『万葉集』の時代にまでさかのぼることができるだろう。

たとえば、万葉集の編者である大伴家持は和歌のなかでの「助詞」の有無について言及をしている<sup>3</sup>。このように助詞の存在を意識せざるを得なかったのは、大伴家持のような歌詠み、そして漢文を読み取る必要があった僧侶や学者たちにとって助詞の性質がわからなければ和歌を詠んだり漢文を日本語で読み取ったりすることが難しかったからである。このことから、助詞こそが日本語という言葉のかなめの部分であることがわかる。

2 ヨーロッパ文化の父であるラテン語については古くから文法が存在する。ラテン語は別格なのである。

3 『日本語はいかにしてつくられたか？』（小池清治、筑摩書房、p.188-192）より。以下も同じ。

漢文には日本語の助詞にあたるものは基本的には存在しない。そのため僧侶や学者たちは中国から輸入された経典などを読み取る際に、それぞれの漢字のスマや真ん中に赤点を打って、それを助詞の読み取り記号とした。これは「ヲコト点」と呼ばれており、この「ヲコト点」の一般的な呼び名が「てにをは」「てには」である。

日本語を「てにをは」とそれ以外の語（「詞」）とを2分して説明した最初の本は、『手爾葉大概抄』（てにはたいがいしよう）という本だとされている。同書の成立年ははっきりしないが、室町初期以前であることは確かなようである。このように江戸時代以前にも、日本語に関するさまざまな研究があったようであるが、それらの考察は確立した「文法モデル」と呼ぶにはまだまだ不十分なものであった。

## 本格的な日本語文法研究のはじまり

日本語文法の構築を自覚的に模索し、ある程度の体系化を果たした最初の人物は、イエズス会宣教師として16世紀末に日本にやってきたジョアン・ロドリゲスだとされている。ロドリゲスは、1604年から1608年にかけて『日本語文典』という文法書を発刊した。これが史上初の日本語文法書だとされている。優れた通詞であったロドリゲスは、西欧言語の文法モデルをもとにして日本語の構造を分析したのである。

日本語人としての最初の文法学者と呼ぶべき人々は、江戸時代後期の富士谷成章、本居宣長、本居春庭、鈴木服だと考えることができる。彼らは、古来の日本語文献をよく吟味することを通じて、そのなかに潜んでいる体系と法則を導き出そうとした人々である。

文化人類学の学問用語で、ある文化を探求する際にその文化に属する人間がおこなう探求のありかたを「イーミック」といい、その文化には属さない人間がおこなう探求のありかたを「エティック」という。この言い方を借りるならば、本居宣長、春庭、鈴木は「イーミック」な立場から日本語を探求し、ロドリゲスは「エティック」な立場から日本語を探求したといえるだろう。

ただしこれらの先駆的研究は、その後の大槻文彦、橋本進吉を経由した政府公認の学校国文法には大きな影響を及ぼさなかった。明治政府以降の日本政府は、日本や東洋の文明を西欧文明に比べて劣等なもののみなしてそれを捨て去り、その代わりに西欧文明を導入しようとしたからである（これが「文明開化」の本質である）。したがって大槻や橋本が江戸期の学問を参考にしなかったのは、ある意味では当然のことといえる。

## 学校国文法（大槻文法）の完成

さきに英文法はイギリス国民の英語に対する劣等感を克服するためにつくられたものと述べた。そうしたメンタリティは日本語の文法の場合も同じであった。すなわち、現在日本で広く教えられている学校国文法の場合も、欧米諸国に対する言語的な劣等感を克服するために、当時の国家的な使命のもとにつくりあげられたものである。

なにしろ明治という時代は、初代文部大臣の森有礼が「日本語などという劣等な言語は捨て去って、思い切って英語を我々の国語として採用しよう」と真剣に目論んだ時代であった。郵便制度の生みの親である前島密は「文明の進歩を阻害する」漢字を廃止する運動の主導者であった。そして大槻文彦もこうした当時の「開明的」な人々のひとりであった。明治維新つまり西欧文明の受容が当時の日本と日本人にいかに大き

なショックを与えていたかが、ここからもよくわかる<sup>4</sup>。

こうした時代背景をもとに新たに生み出された文法が、大槻文法である。大槻玄沢の孫である大槻文彦は、文部省からの委託を受けて、日本初の国語辞典『言海』をつくりあげた。その巻頭部分としてつくられた「語法指南」が、1897年（明治30年）に『広日本文典』として独立して出版された。これが近代日本初の「公的」日本語文法書である。

大槻には、もともと文法書を書く意図も意志もなかった。あくまでも辞書を完成させることが大槻の大目的だった。しかし西欧語の辞書には「品詞」という項目があった。文部省と大槻の目標は西欧の辞書に匹敵する日本語の辞書をつくることであつたから、西欧語の辞書にあるものは日本語の辞書にもなければならぬ。それが「文明国」としての日本の存在証明であると彼らは考えた。

そこで大槻はウェブスターの辞書の巻頭に載っている英文法と従来の漢文法とを合体させて『言海』の巻頭の「語法指南」をつくりだした。こうして英文法を基盤とする日本語の文法、つまり「学校国文法」の基礎が誕生したのである。

大槻と文部省がつくった学校国文法はその後、国民教育の普及とともに急速にその影響力を増していった。大槻とほぼ同時期に松下大三郎が日本語人による日本語のための最初の文法書『日本俗語文典』（1901年、明治34年）をつくっているが、学問的な影響力はどうであれ、その社会的な影響力は文部省をバックとする大槻の『広日本文典』とは比べものにはならないほどに小さなものであつた。

#### 英文法との誕生への道筋の違い

このように、英文法と学校国文法とは自国語に対する劣等感を克服するためにつくられたという点においては同様なのであるが、ただ、両者には完成に行き着くまでの道筋に大きな違いがあつた。イギリスにおいては母語すなわち英語の文法を確立しようとする努力が、すでに1500年代中盤からはじまっていた。そしてその後も英文法の確立のためにさまざまな試みがなされていた。Murray 文法とは、そうした膨大な営みのうえに花開いた一輪の精華だつたといえるだろう。

ところが、わが国の明治期の学校国文法は Murray 文法のように数百年の時の練磨を経たのちに完成したというものではない。すでに述べたように日本にも江戸時代には日本語の文法を確立しようとする確かな試みがあつたのだが、残念なことにその成果は学校国文法の確立にほとんど活かされなかつた。当時の学校国文法とは、小国日本が欧米列強に一刻でもはやく追いつくために英文法を参考にして急ごしらえでつくりあげたものであつた。そのため、当然ながら本家本元である英文法の影響を強く受けることとなつた。

こうして日本語の実態を反映していない文法概念が学校国文法のなかに数多く盛り込まれることになつた。ちょうど文明開化のさなかに日本社会の実態を反映していないさまざまな概念が政治や経済や産業のなかにつぎつぎと盛り込まれていったのと同じように、そしてこのことが現在にまでいたる日本語文法の混乱につながることとなつた。

## 日本語教授のための日本語文法の発展

1970年代ごろになると、明治以降の伝統の流れをくむ学校国文法が持つ矛盾点を指摘する声徐徐

<sup>4</sup> 西欧文明の受容の問題はもちろん当時の日本だけの問題ではない。現在の日本のみならず、現在のイスラム問題なども大きく捉えれば、これと同じ根を持っていることがわかる。

に高まってきた。その中心のひとつとなったのは、日本語ノンネイティブ、すなわちいわゆる「外人」に日本語を教える人々つまり日本語教師たちであった。日本語教師にとっては、従来の国文法を使っている日本語ノンネイティブへの日本語教育がうまくいかないという差し迫った問題があったからである。

こうした状況から、新しいかたちの日本語の文法が「官」（国家）とは離れたところで構築されていくようになった。このようにして構築された文法体系は、従来の官制の文法が「学校国文法」と呼ばれるのに対して、ただ「日本語文法」と呼ばれている<sup>5</sup>。

## 日本語の文法の現在

現在、日本語の文法は一般社会のなかでどのようにとり扱われているのだろうか。じつは学校国文法と日本語文法とが学校教育の現場と日本語教育の現場とでうまく棲み分けているという状態である。小中学校などではいままなお学校国文法が教えられている。皆さんも学校でこの国文法の体系を教わってきたはずである。それに対して日本語ノンネイティブ向けの日本語教育の現場ではおもに日本語文法が用いられている。

こうして日本の近代化の礎となった国文法と、日本語ノンネイティブへの言語教育的なニーズから生まれた日本語文法という2つの日本語文法が並存するという、少し不可思議な事態が生じ、それがいままなお続いている。

## 現代日本語三脚論

---

### 日本語は二度、接ぎ木をされている

「ことば」は生命体である。私のイメージでは、それは樹木に近い。私たちを支えてくれている存在であるが、しかし普段はそのありがたみになかなか気づかない。ただし世話を怠ったり、あるいは枝を折ったり根を踏み固めたりしていると、そのうちに少しずつ弱っていき、ついには枯れてしまう。そして一度枯れてしまえば、もう二度と生きかえることはない。

日本語という樹木は、二度たいへんな接ぎ木をされた樹木である。最初は1500年ほど前のことであった。まだ幼木だったときに中国語というまったく種類の違う樹木を接ぎ木された。漢語の流入である。そのため、日本語という樹木でありながらも、その知的語彙のほとんどが中国語という樹木になってしまった。サクラだかマツだかよくわからない、ある意味で奇妙な樹木となったのである。

そうやって千数百年のあいだ、この日本列島のなかで生き延びてきたのであるが、200年ほど前に、さらにもう一度接ぎ木をされることになった。相手は西欧語という、今度もまったく異質であり、かつ繁殖力の異常に強い木であった。

そこで日本語は、西欧語という樹木を中国語という樹木のうえに、さらに無理やりに接ぎ木をした。西欧語を漢語に訳したのである。これは世界の歴史上でも他に類のない荒業であったが、日本語という樹木はそれでもなんとか生き延びることができた。

---

<sup>5</sup> こうした捉え方が事態をきわめて単純化したものであることは指摘しておかなければならない。実際には国文法と日本語文法のあいだで重なり合う部分も大きい。しかし一方で主語や活用といったきわめて重要な部分での食い違いもみられる。こうした違いはやはり見逃すことはできない。

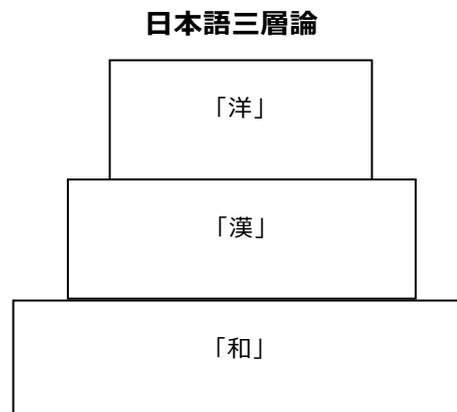
しかしそうやって二度の歴史の激変期に大きな接ぎ木をして生き延びてきたものであるから、その格好はとも奇妙なものになってしまった。

このサクラだかマツだかスギだかわからないかたちになった言語が、現代日本語である。そして日本語人の心情や思考とは、この数奇な運命を経てきた樹木の果実である。

## 現代日本語三脚論

こうしたことから現代の日本語は、「和」「漢」「洋」という三脚に支えられた複合的な言語となった。

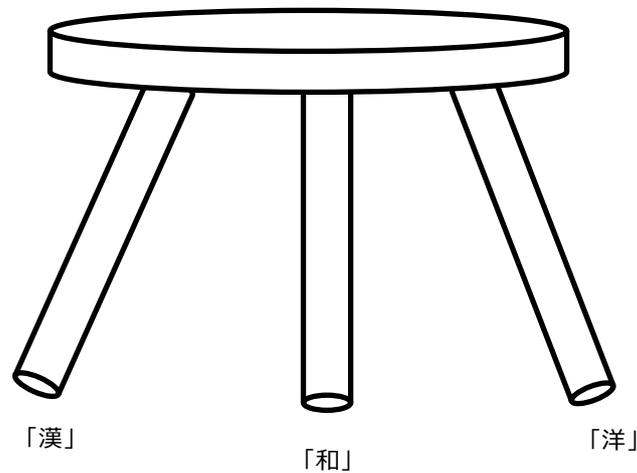
日本文化の産物が「和」「漢」「洋」の融合したものであるという論は珍しくないが、そうした論のほとんどは「三脚」ではなく、「三層」という発想をもとにしている。まず土台として「和」の文化があり、そのうえに「漢」の文化がのっかっており、さらにそのうえに「洋」の文化がのっているというイメージである。



しかし、この「三層」という考えを日本語にあてはめると、上層の「洋」の層や「漢」の層がとりはられても、「和」の層だけでなんとか日本語は日本語として成り立つということになる。

私の主張はそうではない。現代日本語は「和」「漢」「洋」の三脚があってこそ成り立っているのであって、そのうちの一脚でも欠けてしまうと現代日本語は現代日本語として成り立たなくなるというものである。これが私の「現代日本語三脚論」である。

### 現代日本語三脚論



現代日本語のように三脚によって支えられている複合言語は世界でほかに類をみないと私は考える。たとえば英語はゲルマン文化とラテン文化の複合体であるが、そうした複合はあくまでも西欧文化のなかでのことにすぎない。その証拠のひとつとして彼らはローマ字のみを用いている。ところが現代日本語の場合には漢字、かな、ローマ字という3つの本質的に異なる文字体系を混在して使っている。

こうした日本語の複合化を、無原則、無節操といった弱点として捉えることもできるだろう。実際、これまで多くの日本の知識人が、そうした視点から現代日本語と現代日本文明を悲観的に捉えてきた。

だがこの複合化を、原則に縛られずに自由である、複眼思考が可能である、といった比類のない長所として捉えることもできるはずである。当事者である私たち日本語人は、自分たちの文明を肯定的に評価すべきと私は考える。そして世界の類のないこの複合文明を、さらに進化発展させていくという道をとるべきであろう。

## 第2部 心と言葉のグローバル日本語文法

# 1 章

## 日本語文の三層構造

### 【要約】

---

- 「心と言葉のグローバル日本語文法」では言葉の働き（機能）として「命題/叙述内容(認識・思考)」「対事的モダリティ(判断・態度)」「対人的(モダリティ伝達)」という3つのカテゴリーを設定している。
- 言語において客体として表現された「認識や思考のまとまり」のことを「命題/叙述内容」と呼ぶ。「命題/叙述内容」とその要素に対する主体的な判断・態度のことを「対事的モダリティ」と呼ぶ。「命題」「対事的モダリティ」をその場のコミュニケーションの相手側に伝えるうえでの伝達のあり方(丁寧/非丁寧、敬意/非敬意、他)のことを「対人的モダリティ」と呼ぶ。
- 私たちはみずからの思考や判断や態度を言語として表現するとき、この3つの機能を一体的に利用している。命題/叙述内容(認識・思考)、対事的モダリティ(判断・態度)、対人的モダリティ(伝達)の3つのアプローチがそろってはじめて私たちはさまざまな事象に対するみずからの心の動きを十分に言語化し、他者と共有できる。
- 言語表現と言語機能の関係性において非常に重要な点は、ひとつの表現が複数の機能を併せ持つということである。ある表現が命題、対事的モダリティ、対人的モダリティという3つの機能のうちのどれかひとつの機能だけを持っているわけではない。
- 日本語の文とは、「命題」というあんこが、「対事的モダリティ」「対人的モダリティ」という2枚の皮にくるまれた、「まんじゅう」構造をしている。
- 日本語の表現の最大の特報として対人的モダリティの機能が他の言語に比べて抜きんで強力なことが挙げられる。そのため表現のなかには対事的モダリティもなく、ただ対人的モダリティしか表さないものもある。

☆☆☆

### 1. 命題、対事的モダリティ、対人的モダリティ

---

私たちが日本語を通じて認識し、思考し、表現するとはどういうことかを考える前提として、日本語が持っている働き（機能）について考えてみたい<sup>6</sup>。

「心と言葉のグローバル日本語文法」では言葉の働き（機能）として「命題/叙述内容(認識・思考)」

---

<sup>6</sup> なお、「言葉の働き（機能）」については古今東西でさまざまな主張がなされ、さまざまな理論が構築されているが、ここで紹介する機能分類は私の考えによるものである。とはいっても言葉の機能に関する私の考えがその他一般の理論・主張とまったくかけ離れたものではないのは当然のことである。ただ、私がつくった「心と言葉モデル」の場合には、「言葉の働き（機能）」を考えるうえの基盤が「話し言葉」ではなく「書き言葉」であるという点が言葉の機能に関する一般的な考え・理論と異なるという点もよいかもしれない。

「対事的モダリティ(判断・態度)」「対人的(モダリティ伝達)」という3つのカテゴリーを設定している<sup>7</sup>。以下、それぞれの機能について説明する。

## 命題/叙述内容(認識・思考)

私たちは、言葉を使ってこの世界を認識し、さまざまなことを思考する。言語において客体として表現されたこうした「認識や思考のまとめり」のことを「命題/叙述内容」と呼ぶ。

### 対事的モダリティ(判断・態度)

「認識や思考のまとめり」としての「命題」やその構成要素に対して、私たちはそれがどのような機能や意味を持つのかを主体的に判断し、それに対する態度を決める。このような「命題/叙述内容」とその要素に対する主体的な判断・態度のことを「対事的モダリティ」と呼ぶ。

### 対人的モダリティ(伝達)

「命題/叙述内容」「対事的モダリティ」をその場のコミュニケーションの相手側に伝えるうえでの伝達のあり方(丁寧/非丁寧、敬意/非敬意、他)のことを「対人的モダリティ」と呼ぶ。

私たちはみずからの思考や判断や態度を言語として表現するとき、この3つの機能を一体的に利用している。命題/叙述内容(認識・思考)、対事的モダリティ(判断・態度)、対人的モダリティ(伝達)の3つのアプローチがそろってはじめて私たちはさまざまな事象に対するみずからの心の動きを十分に言語化し、他者と共有できる。

## 2. 表現の多機能性——ひとつの表現が複数の機能を併せ持つ

言語表現と言語機能の関係性において非常に重要な点は、ひとつの表現が複数の機能を併せ持つということである。別の言い方をすれば、ある表現が命題、対事的モダリティ、対人的モダリティという3つの機能のうちどれかひとつの機能だけを持っているわけではないということである。

例をみてみよう。夏目漱石に有名な小説の出だしの有名な一文、「吾輩は猫である。」である。

吾輩は猫である。

この表現に含まれている命題、対事的モダリティ、対人的モダリティという3つの観点から分析をしてみると、その結果は次のようになる。

- 命題(認識・思考) : 「わたしが猫であること」

---

<sup>7</sup> 言葉の働きにはそのほかにも、たとえば「芸術性」などといったカテゴリーを設定することもできるが、「心と言葉モデル」ではそうしたカテゴリーは取り扱わないことにする。

- 対事的モダリティ(判断・態度) : 「～は」「である」
- 対人的モダリティ(伝達) : 「吾輩」「である」

#### 命題(認識・思考)

ここでの命題(認識・思考) は、「わたしが猫であること」である。記号的に表現すると、「わたし = 猫」である。関数的に「ある(わたし、猫)」と表現することもできるだろう<sup>8</sup>。

#### 対事的モダリティ(判断・態度)

ここでの第1の対事的モダリティは、「～は」を用いて「わたし」をトピック(主題)とするという判断・態度である。もし「わたし」ではなく「猫」のほうをトピック(主題)とする判断をおこなっていけば、「吾輩は猫である。」ではなく「猫は吾輩である。」という表現になっていたはずである。

第2の対事的モダリティは、「～である。」によって断定をしている判断である。日本語の「である」には、強い断定の判断・態度が含まれている。

#### 対人的モダリティ(伝達)

この文で対人的モダリティ(伝達)の役割を果たしているのは、「吾輩」「～である」という表現である。

「吾輩」は、聞き手/読み手に対して話し手/書き手の社会的ポジション(ここでは男性、年配、など)を伝達するための表現である。これを、「わたし」「わたくし」「僕」「オレ」「あたい」などにすると、別の社会的ポジションを聞き手/読み手に伝達することになる。

「～である」は、うえの対事的モダリティの項で述べた強い断定の判断・態度とともに、自分が聞き手/読み手に特に丁寧な気持ちも表現しない、ということを手相手に対して伝達している表現である。そのため、一般的には中立的ではなく少し横柄なイメージとなる。ゆえに話し言葉では用いることがほぼ不可能といえる。

この分析を、表現のほうからみても次のようになる。

「吾輩は」という表現は、命題要素(わたし)、対事的モダリティ(トピック)、対人的モダリティ(社会的ポジション)という3つの機能を併せ持っている。なお、「命題要素(わたし)」と書いたが、この「わたし」という表現も命題要素としての機能だけではなく対人的モダリティの機能(社会的ポジション)を併せ持っている。したがって純粋に命題要素だけを表現しているわけではない。

日本語には自分自身を示すうえで英語の“I”や中国語の「我」のように純粋に命題要素の機能のみを持っている表現が存在しない。これは日本語の特性を考えるうえで最も重要な点のひとつである。

「猫である」という表現の「猫」については純粋な命題要素と考えてよい。ただし、名詞がすべて純粋な命題要素なのではない。たとえば、「猫」という表現であればモダリティ要素が含まれていないと考えてよいが、これが「ネコちゃん」であれば、そこには対事的モダリティ(猫に対する判断・態度)と対人的モダリティ(それを伝達しようという意志)が含まれている。同様のことが、多くの名詞表現に当てはまる。

「猫である」の「である」については、「心と言葉のグローバル日本語文法」の観点からみると、命題としての機能は持っていないと考えてよい。「である」を外して「吾輩は猫。」だけでも命題として機能を果たしているか

---

<sup>8</sup> 自然言語の表現をこのような記号的な表現に移し替えたものを「心の文法」では「命題関数」と呼ぶ。これは記号論理学の命題関数の概念を借用したもののだが、記号論理学の命題が真・偽を定めるためのものであるのに対して、「心の文法」での命題関数はそうした制約を持っていないところが本質的に異なっている。「心と言葉のグローバル日本語文法」の場合の命題関数は、「述部」を関数として「補足部」を変数とするのが基本形である。

らだ。「である」が持つ機能は、対事的モダリティ(断定するという判断・態度)と対人的モダリティ(「です」とは異なり、相手に対する丁寧度が低い伝達)である。

以上をまとめると、次のようになる。

「吾輩は」= 命題要素(わたし)+対事的モダリティ(トピック)+対人的モダリティ(社会的ポジション)

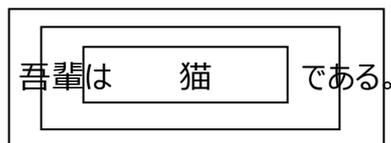
「猫」= 命題要素(猫)

「である」= 対事的モダリティ(断定の判断・態度)+対人的モダリティ(低い丁寧度)

「吾輩は猫である」という表現は、これらの命題要素、対事的モダリティ、対人的モダリティのすべてを一体化した「心のはたらき」を持つものである。

これを敢えて図示するとすれば、次のようになる。

吾輩は猫である。



いちばん内側の四角の層が命題、真ん中の四角の層が対事的モダリティ、いちばん外側の四角の層が対人的モダリティを表すものであると考えてほしい。

この図から、「吾輩は」という言語表現は内側の命題とまんなかの対事的モダリティと外側の対人的モダリティのいずれの機能も強く有していることがわかる。いっぽう「猫」という言語表現は内側の命題の機能を強く有していることがわかり、「である。」という言語表現はまんなかの対事的モダリティと外側の対人的モダリティという2つの機能を強く有していることがわかる。

これまでの文法は、それぞれの表現が命題、対事的モダリティ、対人的モダリティのうちのひとつの意味を担っているということを前提として分析がなされていた。だがそうした方法論では言葉の役割の全容を解明することができないし、文法理論を実践の場で有効に活用するケースも限られてしまう。これまで文法が実際の役に立たないと一般に思われてきた理由のひとつがここにあるのではないかと私は考えている。

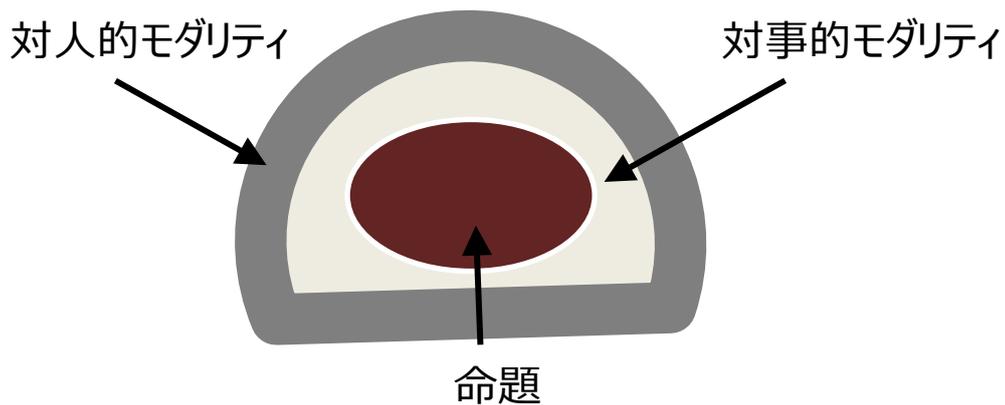
### 日本語文の「まんじゅう」構造

ここからは、命題、対事的モダリティ、対人的モダリティという3つの機能の観点から日本語の表現と英語の表現とを比較分析を行ってみる。まずは日本語の表現である。

日本語での命題、対事的モダリティ、対人的モダリティの3機能を考える際、私(成瀬)はその比喻として「まんじゅう」をよく用いている。比喻的にいえば、日本語の文とは、「命題」というあんこが、「対事的モダリティ」「対人的モダリティ」という2枚の皮にくるまれた、「まんじゅう」構造をしている。



「命題」という「あんこ」が、  
「対事的モダリティ」「対人的モダリティ」という 2 枚の皮にくるまれている。



日本語の表現には「アンなしまんじゅう」タイプもある

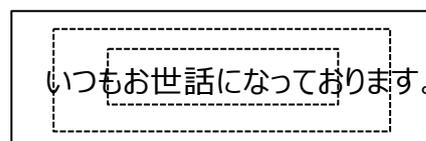
さらに日本語の表現の最大の特報として、対人的モダリティの機能が他の言語に比べて抜きんで強力なことが挙げられる。そのため、次に挙げるメールの冒頭の文である「いつもお世話になっております」のように、命題（あんこ）もそれに伴う対事的モダリティもなく、ただ対人的モダリティしか表さないものもある。

いつもお世話になっております。

命題：なし

対事的モダリティ：なし

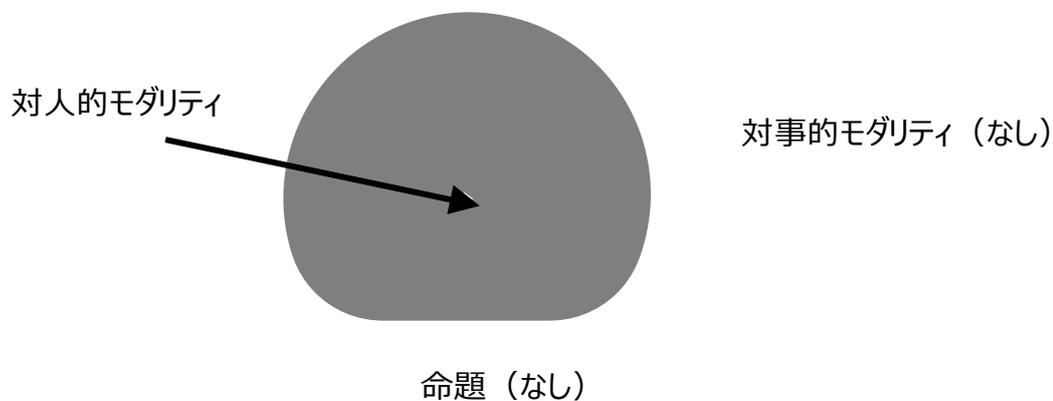
対人的モダリティ：儀礼・謙譲



これらを、まんじゅうに例えるならば、アンのない「アンなしまんじゅう」のようなものである。



「アンなしまんじゅう」タイプもある。



### 3. 日本語文の分析

---

ここからは、日本語文の三層構造とベースとして、日本語での思考を分析する。日本語での思考を正しく分析することによって、これまで見ていなかった日本語のさまざまな特性が明確に見えてくる。また日本語の思考を正しく分析できる能力は、日本語から英語への翻訳の際の重要な基盤ともなる。

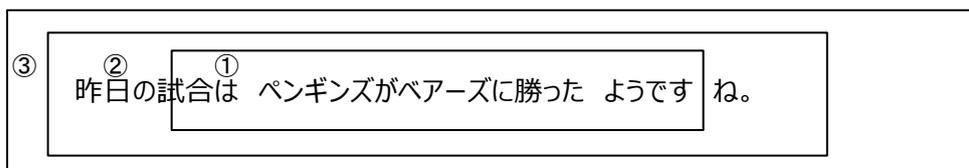
以下、いくつかの例題をつうじて、日本語文の特性をみてみることにしよう。

#### 【例 1】

昨日の試合はペンギンズがベアーズに勝ったようですね。

#### 【解説】

この文の構造を「認識 = 命題」「対事的モダリティ(判断・態度)」「対人的モダリティ(伝達)」という 3 層の入れ子構造として分析してみると、次のとおりである。



「認識」= 命題：「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝った」

「判断・態度」= 対事的モダリティ：「昨日の試合は」「ようだ」

「伝達」= 対人的モダリティ：「です」「ね」

以下、各要素について簡単に説明をしていく。

#### 認識（命題/叙述内容）

この日本語文で「認識」されている内容（命題）は「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝った」ことである。

#### 判断・態度（対事的モダリティ）

「明日の試合は」の「～は」は、「～」の部分とその文のトピック（主題）として扱うという話し手/書き手の対事的モダリティ(判断・態度)を表している部分である。

同時に、この「～は」は、「昨日の試合で」の「で」の役割も兼務しており、「認識」での役割の一部も担っている。「～は」が、「認識」（命題/叙述内容）と「判断・態度」（モダリティ）の両方の役割を担っているというのは、日本語が持っているユニークな特徴のひとつである。

「～ようです」に含まれる要素「～ようだ」は、「認識」（命題/叙述内容）に対する話し手/書き手の「判断・態度」を示している。ここでの「ようだ」は、「昨日の試合でペンギンズがベアーズに勝ったこと」が断定できずに類推しているという話し手/書き手の判断・態度を示している。

#### 伝達・態度（対人的モダリティ）

「～ようです」のなかの「～です」の部分は、相手に対する「伝達」の部分である。この「～です」は、相手に対する丁寧な気持ちを伝えるという役割を担っている。

日本語では、人に対する「伝達」の部分までを必ず表現しなければならない。たとえば、「～ようです」のかわりに「～ようだ」にすると、それによって中立的な伝達表現になるのではなく、相手に対する丁寧な気持ちがないという気持ちを伝達する表現になる。

この「伝達」（対人的モダリティ）の不可欠性が日本語という言葉の最大の特徴のひとつである。なお英語では、この伝達（対人的モダリティ）の部分は不可欠な要素ではない。したがって、話し手/書き手の「認識」「判断・態度」を中立的なかたちで表現することが可能である。

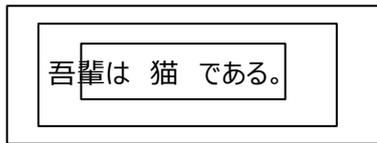
最後に付加する「～ね」も、相手に対する「伝達」（対人的モダリティ）の部分である。ここでは、相手に対して確認を求める役割を持っている。この部分は不可欠な要素ではないので、別になくてもかまわない。

【例 2】

吾輩は猫である。

【解説】

夏目漱石の「吾輩は猫である。」という文で表現されている思考を分析してみる。その結果は、つぎのようになる。



「認識」= 命題：「わたしが猫であること」

「判断・態度」= 対事的モダリティ：「わたしは」「である」

「伝達」= 対人的モダリティ：「吾輩」「である」

以下、各要素について説明をしていく。

認識（命題/叙述内容）

ここでの「認識」（命題/叙述内容）は、「わたしが猫である」ことである。

対事的モダリティ（判断・態度）

ここでの対事的モダリティ(判断・態度)の第 1 は、「～は」を用いて「わたし」をトピック（主題）とするという判断・態度である。もし「わたし」ではなく「猫」のほうをトピック（主題）とする判断をおこなってすれば、「吾輩は猫である。」ではなく「猫は吾輩である。」という表現になっていたはずである。

ここでの対事的モダリティ(判断・態度)の第 2 は、「～である。」によって断定をしている判断である。日本語の「である」には、強い断定の判断・態度が含まれている。例題 1 での「ようだ」が弱い判断・態度であることとは判断・態度内容は違うものの、それが果たす役割としては同じものである。

対人的モダリティ（伝達）

この文で「伝達」の役割を果たしているのは、「吾輩」「～である」という表現である。

「吾輩」は、聞き手/読み手に対して話し手/書き手の社会的ポジション（ここでは男性、年配、など）を伝達するための表現である。これを、「わたし」「わたくし」「僕」「オレ」「あたい」などにすると、別の社会的ポジションを聞き手/読み手に伝達することになる。

「～である」は、うえの「判断・態度」の項で述べた強い断定の判断・態度とともに、自分が聞き手/読み手に特に丁寧な気持ちも表現しない、ということを手相手に対して伝達している。そのため、一般的には中立的ではなく少し横柄なイメージとなる。話し言葉では用いることがほぼ不可能といえる。

【例 3】

ちょっと、ないようですねえ。

### 【解説】

相手に対する態度を言語的に必ず示さなければならないという日本語の特徴は、日本人にとっては自然なことであるが、世界的にみると特殊な言語形式であるといつてよい。英語を含む西欧語だけではなく、中国語でもこうした言語形式は存在しない。もちろん、コトに対する態度表明はどの言語でもおこなうのであるが、相手に対してこれほどまでに「気遣い」をする言語は、ほとんどないだろう。

中国人の日本語学者である彭飛（ポンフェイ）氏は、次のような逸話を紹介している<sup>9</sup>。

あるとき、ポンフェイ氏がお店に入って「××はありませんか？」と尋ねたところ、その店主が店の中をひとり探したあとで「ちょっと、ないようですねえ」と答えた。

ポンフェイ氏は、この店主の言葉にとっても驚いた。というのは、店主はポンフェイ氏の目の前で店中を探して、それでも品物はなかったのであるから「ありません」で十分ではないのか。ところが、実際には「ちょっと、ないようですねえ」——日本語の勉強をはじめたばかりのポンフェイ氏には、この「ちょっと」が何なのか、「ようですねえ」がどういう意味なのか、まったくわからなかったのである。

日本人であれば、上のような状況で店主が「ありません」とはいわないことは自然に納得できる。「ありません」ではあまりにそっけなさすぎて、その品物を探している相手の気持ちを逆なでするような気がする。自分が客だったらそういう言い方はされたくないとも思うだろう。そこで、相手を少しでもがっかりさせないようにと気を使って「ちょっと」「ようですねえ」をつけるわけである。

日本語人としてはとても自然な発想であるが、それ以外の文化の人間たちにとっては（西欧人だけでなく中国人などアジア人も含めて）そうした発想は自然ではないということを私たちは覚えておかなければならない。

ただし、これは日本語人以外の人間が「気遣い」をできないということでは決してない。日本語人以外は、別のかたちの言語形式で気遣いを表現できる。上の例でいえば、「ちょっと、ないようですねえ。」に近い英語表現としては、I'm sorry, but we don't have any stock here.などが挙げられるであろう。これであれば「ちょっと」「ようですねえ」に表された気遣いの一部が、英語でも伝わるはずである。

ちょっと、ないようですねえ。

I'm sorry, but we don't have any stock here.

もちろん、I'm sorry と「ちょっと～のようですねえ」では気遣いの質や量がまったく違うので、一対一対応ではない。「いまの成績では〇〇大に合格するにはちょっと苦しいようですねえ。」の「ちょっと～のようですねえ。」に対して I'm sorry は使えない。I'm sorry を使うのは非常に明白な気遣いの場面であって「ちょっと、～ようですねえ」のような「ちょっとした」気遣いの場面ではないのである。

### 「気遣いまみれ」の弊害

ポンフェイ氏は著書で日本語の「ちょっとした」気遣い表現を数多く取り上げ、それらが人間関係を円滑にするうえで重要な役割を果たしていると指摘して高く評価している。確かにそういった一面もあるにはあるのだ

9『日本人と中国人とのコミュニケーション—「ちょっと」はちょっと…ポンフェイ博士の日本語の不思議』、彭飛、和泉書院

が、そのいっぽうで日本語の「気遣い」表現には事実をぼやかしてしまうという大きなマイナス点もあることを私たちは忘れてはならない。日本語にはこうした気遣い表現が多すぎるがゆえにイエス・ノーがはっきりせず、肝心の内容がうまく伝わらないケースがままある。私のいうところの「気遣いまみれ」の弊害である。

あるビジネスマンから聞いた話であるが、海外への技術研修指導に出かけたときに教えた相手から何か問題があるかどうかを尋ねられた際に「問題はないと思いますよ」を直訳して I think there is no problem. といったところ、あまり良い顔をされなかったということである。相手側としては I think などはずけずにあくまで客観的に No problem. と事実を事実として言い切っただけだと思われる。そのビジネスマンは事実として伝えつもりだったのであるが、いつものくせでつい「～と思います」とつけてしまったのであろう。

一般的に日本語人の英語には、「はい」「～と思います」の直訳表現としての Yes と I think が非常に数多く出てくる。どちらも相手に対する気遣いから出てくる表現なのであるが、実際には英語でのコミュニケーションを大きく阻害する要因ともなっている。

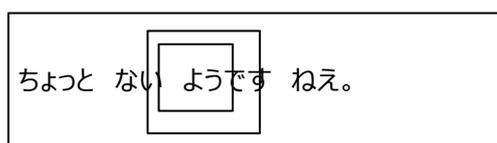
ポンフェイ氏のいうように日本語の気遣い表現は非常に価値あるものではあるが、気遣いもあまりに過ぎるようだと、適切なコミュニケーションが成り立たない。場合によっては、そうした対人関係を抜きにした客観的な表現が必要になってくるのである。これからの日本語人は気遣いの文化を保持しつつも、そうした気遣い抜きのストレート表現もうまく使いこなせるようにならなければならない。

さて、この「ちょっと、ないようですねえ。」を「心と言葉のグローバル日本語文法」の観点から分析をすると、次のとおりである。

「認識」（命題/叙述内容）：「（品物が）ないこと」

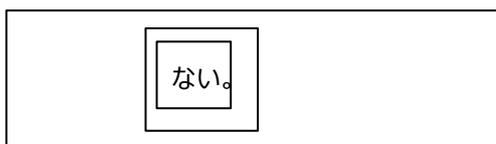
「判断・態度」（対事的モダリティ）：「ない」に含まれる断定

「伝達」（対人的モダリティ）：「ちょっと」「ようです」「ねえ」



ここでの「認識」は「(品物が)ない」ことである。それだけである。したがって、中国語や英語のように、文において「認識」「判断・態度」「伝達」の3層を必ずしも表現する必要のない言語であれば、ポンフェイ氏のいうように「ない。」（少し丁寧にするなら「ありません。」）で言語表現として必要かつ十分である。実際、これと同じ場面であれば、英語ならば「No」、中国語ならば「没有」だけを述べて、おしまいにするのが普通であろう。相手への気遣いについては、表情やジェスチャーといった非言語的コミュニケーションツールで伝えるだろう（あるいは、それも伝えないのが一般的かもしれない）。

しかし、「認識」「判断・態度」「伝達」の3層を必ず表現しなければならない日本語の世界では、そうはいかない。もしも日本語で店の主人が、この場で「ない。」などと答えたとしたら、それは伝達機能としてはニュートラルな伝達ではなく、非常に無礼な伝達であることは明らかである。



ていねい体を用いて「ないです。」「ありません。」としても、それではやはり相手への気遣いがまだ足りないと、日本語人であれば自然と考えるだろう（ここがポンフェイさんに理解できなかったところである）。そこでどうするかといえば、わたしたち日本語人は「ちょっと」「ようですねえ」といった表現をつけるのである。このように、判断・態度を曖昧化することやさまざまな伝達の表現を加えることによって、私たち日本語人は相手への気遣いを表すのである。

日本語では、「～のようだ」「～らしい」「～だと思ふ」「～かも知れない」というような本来ならば「判断・態度」を示す表現を、相手への気遣いを示す「伝達」の表現として使うケースが、非常に多くある。「そのようです。」「そうらしいです。」「そうだと思います。」「そうかも知れませんね。」などだ。これらの表現は、一見すると英語の it seems や I think や It may に対応するように見えるが、多くの場合、そうではない。したがって日英翻訳の現場では、じつは敢えて訳さないことがもっとも適切な訳出になることが多い。

☆☆☆

#### 【例題 4】

いつもお世話になります。

#### 【解説】

うえに述べた「認識」「判断・態度」の表現を「伝達」（気遣い）へと転用している日本語人の言語使用の究極の例が、「いつもお世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」といった表現である。これらの表現を分析するとすれば、次のようになる。

「認識」= 命題：なし

「判断・態度」= 対事的モダリティ：なし

「伝達」= 対人的モダリティ：「いつもお世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」

つまり、こうした表現には「認識」「判断・態度」にあたる内容はなく、たんに「伝達」の一形態として相手への気遣い（礼儀）を示しているにすぎない。当然ながら、これにそのまま対応するかたちでの英語や中国語への翻訳は不可能である。

それにしても、会ったこともない人にはじめてメールを送る際でさえ「いつもお世話になっております。」ではじめるというのは、（もちろん会社としてお世話になっているという意味だろうが）いかななものか。わたしのようなひねくれ者は、そんなメールが届くと「べつにお世話なんか、してないぞ。」などと、ついつい思ってしまう。

☆☆☆

【例題 5】

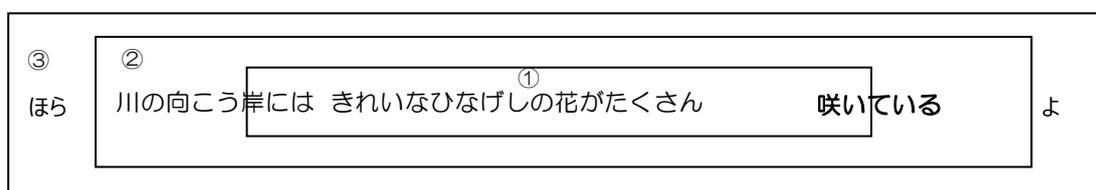
ほら、川の向こう岸にはきれいなひなげしの花がたくさん咲いているよ。

【解説】

これを学校英文法の文節概念を用いて分析すると、次のようになる。

ほら | 川の | 向こう岸には | きれいな | ひなげしの | 花が | たくさん | 咲いているよ。

しかしこれを「心と言葉のグローバル日本語文法」モデルで分析すると、次のようになる。



最初の「ほら」の部分は、「伝達」を表明する機能 = 対人的モダリティを担っている。ここでは相手に対する「呼びかけ」「注意喚起」の機能である。

「ほら」←対人的モダリティ(伝達) (相手への呼びかけ、注意喚起)

次の「川の向こう岸には」の部分は、②の「認識」に対する「判断」を表明する機能 = 対事的モダリティを担っている。ここでは、「～は」のかたち (係り助詞) を利用して「川の向こう岸に」という叙述内容を場のなかでの話題 (トピック) として「判断」して取り立てている。それと同時に、この「川の向こう岸に」の部分は、①の事象に対する「認識」の機能 = 命題も担っている。ここでは、いま話している話題の事象の「場所」を指し示している。

「川の向こう岸には」←認識&判断 = 命題&対事的モダリティ (「川の向こう岸に」を思考として認識、  
「川の向こう岸には」をトピックとして主体的に取り立て)

このように、複数の機能を担う表現のことを、三上章の用語にあわせて「兼務の表現」と呼ぶことにする。つまり「川の向こう岸には」の部分は、①の事象に対する「認識」= 命題 (「川に向こう岸に」) を表明する機能を担うとともに、②の事象に対する「判断」= 対事的モダリティ (「川の向こう岸には」を表明する機能も同時に担っているということである。

次の「きれいなひなげしの花がたくさん咲いている」の部分は、①の事象に対する「認識」を表明する機能を担っている。簡単にいえば、話し手/書き手が「川の向こう岸) きれいなひなげしの花がたくさん咲いている」という事象を心のなかで認識理解したということである。

「きれいなひなげしの花がたくさん咲いている」←認識 = 命題（事象を思考として認識）

なおモダリティについては西欧言語学では「認識」を補助するものとしてしか扱われていない。なぜ西欧の言語学や文法学が②の「判断」と③の「伝達」を補助的なものとしてしか扱わないかという、実際のところ西欧の言語では「判断」や「伝達」の機能は言語において補助的な役割しか果たしていないからである。

しかし日本語はそうではない。日本語の世界では、相手に対する「伝達」の表明と自己認識に対する「判断」の表明（一般に「陳述」と呼ばれる）は決定的に重要である。特に「判断」の表明は、日本語構文にとって省略不可能な要素である。

日本語にとって用言（動詞、他）は特別な存在

「川の向こう岸にきれいなひなげしの花がたくさん咲いている」のなかの「咲いている」の部分であるが、この用言（動詞、他）の部分は、日本語文において特別な存在といえる。

まず「咲いている」は、①の「事象に対する認識」の機能を担うのであるが、その「担い方」が、それまでの「川の向こう岸にきれいなひなげしの花がたくさん」までの部分とは本質的に異なっている。

前の「川の向こう岸にきれいなひなげしの花がたくさん」の部分は、「Xに、Yが、Z」といったかたちで話し手/書き手の思考を後ろへ後ろへと展開させていく。これを渡辺実氏は「展叙」の機能と呼んでいる。

この機能は、おもに助詞（「～が」「～を」「～に」など）や用言の連体形や連用形（「～する○○」「～して」など）、一部副詞（「昨日」「たくさん」など）が担っている。

いっぽう、「咲いている」（用言）の部分は、次々と展開（展叙）されてきた思考を、すべて一挙に「統合化」させる機能を持っている。これを渡辺氏は「統叙」の機能と名づけた。文のなかでこうした「統叙」（思考の統合化）の機能を持っている成分は、用言（動詞、他）以外にはない。

さらに、「咲いている」（用言）の部分は、②の「事象に対する判断」（ここでは「断定」の判断）の機能も同時に担っている。

したがって、「咲いている」という表現は、①それまでに表現された「川の向こう岸にきれいなひなげしの花がたくさん」までの認識をすべて受けとめてひとつの思考にまとめる「統叙」の機能、②「咲いている」という事象そのものを「認識」する機能、③「咲いている」という事象に対する主体的な「判断」の機能、という3つの機能が同時に含まれているということになる。

☆☆☆

ここまで、日本語文の「認識 = 命題」「対事的モダリティ(判断・態度)」「伝達 = 対事的モダリティ」という3層構造の特性について解説してきた。ここからは複数の文から構成される「文章」について、問に答えるかたちのなかで、その特性をみていこう。

## 問 1

次の手紙文のなかの文をそれぞれに「認識」「判断・態度」「伝達」の3層に分けてください。

貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます。山田商事 営業部の山田太郎でございます。

さて、おかげさまで小社は来る〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えることとなりました。これもひとえに皆様方のご高配の賜物と厚く御礼申し上げます。

そこで、創業以来前進して参れましたことを皆様方に深く感謝し、下記の通り心ばかりの記念パーティーを催したいと存じます。ご多用中のところ、まことに恐縮ながら、何とぞご光栄の栄を賜りますようお願い申し上げます。

まずは、略儀ながら書中をもちましてご案内申し上げます。

### 【解説】

#### 貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます。

認識 = 命題 : なし

対事的モダリティ(判断・態度) : なし

対人的モダリティ(伝達) : 「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます」(儀礼)

「いつも世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」のように、日本のビジネスやあらたまった手紙などに書く慣用表現では、相手への気遣いを表している文が冒頭や末尾にしばしば現れる。

これらは言語表現としてみると具体的な命題内容(いつもお世話になっていること、なにかをお願いしたいこと、相手がよい状態にあること)が含まれているように見えるが、書き手の実際の心の働きとしては、そうした実際の命題内容を表現しようとする意図は基本的に存在しないと私は考える。

したがって、これらの表現における認識(命題)の部分は存在しないと考える。命題が存在しないのであるから、命題に対する判断・態度(対事的モダリティ)もない。したがって、「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます」という言語表現が持つ働きは、相手への伝達(対人的モダリティ)の働きだけだと私は考える。

しかしながら、「いつも世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」と手紙に書くときには本当にそう思っているのだ、という人も中にはいるのかもしれませんが。その場合には、「いつもお世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」などの言語表現のなかには、それなりの認識(命題)が存在することになる。その場合には、

認識 = 命題 : 「あなたの会社が繁栄している」「それが喜ばしい」

対事的モダリティ(判断・態度) : 「ます」(その命題に対する断定)

対人的モダリティ(伝達) : 「貴社」(相手に対する尊敬)、「ご清栄」(ていねい)、「大慶」(ていねい)、「存じ上げます」(ていねい)

などと、なるだろう(まあ、言葉通りの意味として「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます」という言語表現を使う人など実際にはほばいないだろう)。

「心と言葉のグローバル日本語文法」では、「日本語人が認識したことや思考したことは、どのように日本語として表現化されるのか」という方向性で考察をおこなっている。一般的な文法の考察の方向性(その日本語表現にはどのような認識や思考が含まれるのか)とは真逆なのである。

そのため、その言語表現を発している日本語人の認識方法や思考方法次第では、分析の結果が1つに定まらない可能性がたねにある。この点が、多くの人にとって「心と言葉のグローバル日本語文法」の考え方を

非常に理解しづらいところだろう

けれども、少し考えてみてほしいのだが、人間の心の動きなどというものは、そもそもかなりいいかげんなものなのではないだろうか。

たとえば、誰かに「いつもお世話になります」と言った際に、それは単なる儀礼的挨拶なのですか、それとも本当にそう思っているのですか、などと問われても、まあどちらでも、などと答えざるを得ないケースも、まああるように思われる。

「心と言葉のグローバル日本語文法」は、こうした人間の心の「曖昧さ」、よくいえば「柔軟さ」を許容するモデルである。そのためその分析も、よくいえば柔軟、悪くいえば「いいかげん」になる。

ところが、客観性と厳密性を必要条件とする通常の近代科学的な学問体系では、このような柔軟さ（いいかげんさ）を決して許容しない。したがって「心と言葉のグローバル日本語文法」の分析はそうした学問としては成立しない。

私自身は「心」モデルを既存の学問体系になじませる気が最初からないので、それでも問題は何かもない。しかしながら、既存の学問の分析方法に慣れ親しんでいる方々にとっては、ここでおこなっている「心」モデルのような分析や考察のあり方は、なかなか理解しがたく、またなかなか受け入れがたいものであるのかも知れない。

「心」モデルの最終的な目標は、日本語人が日本語人としての世界観や思考のあり方を基盤としつつ、英語の世界観や思考のあり方を習得し、その両方の世界観や思考のあり方を踏まえたうえで、日本語の心と英語の心とをスムーズに往来できるようになることである。

この大目標を達成するためには、既存の学問的なアプローチだけではまったく不十分だと私は判断している。したがって、既存の学問的な分析手法や考察手法を参考としつつも、その枠を乗り越えて、心の動きを中心とする新たな分析と考察を行うことによって、日本語の世界と英語の世界の自由な往来が初めて可能になると私は考えている。

### 山田商事営業部の山田太郎でございます。

認識 = 命題：なし

対事的モダリティ(判断・態度)：なし

対人的モダリティ(伝達)：「山田商事営業部の山田太郎でございます」(儀礼的あいさつ)

まず、このメールの全体像を考えてみると、このメールの差出人が山田商事営業部の山田太郎であるという情報は、この本文の前に当然ながら提示されているはずである。したがって、ここでわざわざ改めて情報提示する意味はない。

それを敢えておこなうのだとすれば、そこには命題内容として提示することではない他の働きがあると考えるのが普通ではないだろうか。それが、伝達領域での「儀礼的あいさつ」という働きであると私は考える。このように、「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます」に続いて自分の名と所属を敢えてもう一度名乗ることによって、儀礼的なあいさつを更に手厚いものにしようとしていると私は考えるのである。

一方、「山田商事営業部の山田太郎であるということ」という命題(認識・思考)を言語的に提示することがこの書き手の心の動きなのであると判断するならば、その場合の分析は次のようになる。

認識 = 命題：山田商事営業部の山田太郎であるということ

対事的モダリティ(判断・態度)：(私は)「である」(命題に対する断定)

対人的モダリティ(伝達) : 「でございます」(ていねい)

**さて、おかげさまで小社は来る〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えることとなりました。**

認識 : 「山田商事が〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎える」

判断 : 「山田商事が～」(命題に対する断定)

伝達 : 「さて」(話題転嫁)、「おかげさまで」(謙譲)、「小社」(謙譲)、「迎えることとなりました。」(ていねい)

「山田商事が〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えること」という認識(命題)と判断(対人的モダリティ)に、いくつかの伝達(対人的モダリティ)表現が加えられた例である。

日英翻訳として考えると、ここまでの文(「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます。山田商事営業部の山田太郎でございます」)には認識(命題)が(私の分析では)存在しないので、英語表現に移すことが、そもそもできない。したがって、「心の翻訳」モデルでいうところの「ゼロ翻訳」という技法を用いる。すなわち、言葉としては翻訳をしない。

それに対して、この「さて、おかげさまで小社は来る〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えることとなりました。」には、「山田商事が〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えること」という認識(命題)および判断(対人的モダリティ断定)が含まれていると私は考える。

しかしそれと同時に、この文にはさまざまなかたちの伝達(対人的モダリティ)要素が含まれていることにも注意が必要である。これらの要素に関しては、英語表現に移すことは非常に難しく、また英語表現にすることの価値も低いものである。したがって、通常であれば翻訳する必要がない。

結果的に、ここまでの日本語から英語へと翻訳するべき要素は「山田商事が〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎えること」という認識(命題)のみになるだろう。具体的には次のような英文が考えられる。

On the day of xxx, Yamada Corporation commemorates its xx anniversary.

**これもひとえに皆様方のご高配の賜物と厚く御礼申し上げます。**

認識 = 命題 : なし

対人的モダリティ(判断・態度) : なし

対人的モダリティ(伝達) : 「これもひとえに皆様方のご高配の賜物と厚く御礼申し上げます。」(謝意)

これも、解釈の仕方次第では、「読み手全員が会社の存続に貢献してきたこと」という認識(命題)が含まれていると考えることは可能であるが、私はこれが単なる儀礼的な謝意表現であると判断した。とすれば、日英翻訳の対象とすることは非常に難しいと私は考える。

**そこで、創業以来前進して参りましたことを皆様方に深く感謝し、下記の通り心ばかりの記念パーティーを催したいと存じます。**

認識 = 命題 : 「我々が関係者に感謝を示すこと」「そのために我々が下記条件で記念パーティーを催す」

対人的モダリティ(判断・態度) : 「である。」(命題に対する断定)、「したい」(命題に対する意思[希望ではない])

対人的モダリティ(伝達)：「そこで」(話題転換)、「お世話になった」(ていねい)、「参りましたこと」(謙譲)、「皆様様方」(ていねい)、「ご高配」(謙譲)、「御礼申し上げます」(ていねい、謝意)、「心ばかり」(謙譲)、「存じます」(ていねい)

「我々が関係者に感謝を示すこと」「そのために我々が下記条件で記念パーティーを催すこと」という認識(命題)及び判断(対人的モダリティ)は、次のように英語表現への転換が可能である。

We give our appreciation to all the parties concerned.  
We will hold a commemorative party as stated below.

1つにまとめると、1例としては、次の通りである。

To give our appreciation to all the parties concerned, we will hold a commemorative party as stated below.

**ご多用中のところ、まことに恐縮ながら、何とぞご光栄の栄を賜りますようお願い申し上げます。**

認識 = 命題：「関係者のパーティーへの出席を我々が希望する」

対人的モダリティ(判断・態度)：「お願いする」(断定)。

対人的モダリティ(伝達)：「ご多用中のところ」「まことに恐縮ながら」「何とぞ」「ご光栄の栄」「賜る」「お願い申し上げます」(すべて儀礼的ていねい表現)

伝達(対人的モダリティ)として膨大な儀礼的ていねい表現が用いられているが、そうしたトッピング要素をすべて取り除くと、「関係者にパーティーへの出席を我々が希望する」という認識(命題)と判断(対人的モダリティ断定)が残る。この部分は、例えば次のような英語表現に転換できる。

We wish those concerned to attend the party.

**まずは、略儀ながら書中をもちましてご案内申し上げます。**

認識：なし

判断：なし

伝達：「まずは、略儀ながら書中をもちましてご案内申し上げます」(儀礼)

冒頭の「貴社ますますご清栄のことと大慶に存じ上げます」と同じく、単なる儀礼表現である。英語表現に対応させるのであれば、yours truly ぐらいだろう。

☆☆☆

問2 問1で3層に分けた各文の「伝達」の部分のカットして「認識」「判断・態度」だけの文をつくってください

い。

【解答】

**山田商事が〇〇月〇〇日に創立〇〇周年を迎える。関係者に感謝を示すために下記条件で記念パーティーを催す。関係者のパーティーへの出席を希望する。**

【解説】

これが、「伝達」（対人的モダリティ）というトッピング部分を除いた認識（命題）と判断（対事的モダリティ）の部分である。なんともそっけないかたちになった。これほどまでに日本語という言語は伝達（対人的モダリティ）表現まみれの言語だということである。

さらにいえば、「いつも世話になります。」「どうぞよろしくお願いいたします。」のように、本来であれば認識（命題）の部分を担当すべき表現であっても、場合によっては伝達（対人的モダリティ）表現として用いられてしまうという傾向が日本語には強く見られる。

より一般化していえば、日本語の世界では対事的な認識・表現から対人的な認識・表現に向かおうとする力がつねに強く働いているといえるのではないだろうか。一方で英語の世界ではその逆に、対人的な認識・表現から対事的な認識・表現へと向かおうとする力がつねに強く働いているように思われる。

さて、上記の認識・判断だけの部分の日本語を、英語にするとどうなるだろうか。これまで示してきた英文を並べてみると、次の通りである。なお、最初に Dear Sir and Madam をつけた。

Dear Sir and Madam:

On the day of xxx, Yamada Corporation commemorates its xx anniversary. To give our appreciation to all the parties concerned, we will hold a commemorative party as stated below. We wish those concerned to attend the party.

Yours truly

英語の世界では、認識（命題）に重視する反面、判断（対事的モダリティ）や伝達（対人的モダリティ）については重視しないので、これだけでもそれほど価値の低い英語表現ではない。

しかしながら、重視しないといっても英語人もやはり人間であるから、判断（対事的モダリティ）や伝達（対人的モダリティ）についても言語としてある程度は表現したくなるのは当然である。特に、このような儀礼的価値を含んだ言語表現ではそういう気持ちになっておかしくない。

そこで、ここにいくつかの英語として判断・伝達の表現をトッピングすると、例えば次のようになります。

Dear Sir and Madam:

It is my great pleasure to inform that on the day of xxx Yamada Corporation commemorates its xx anniversary. To give our appreciation to all the parties

concerned, we will hold a commemorative party as stated below. It would be a pleasure and honor if you could attend the party.

Yours truly

この程度の判断（対事的モダリティ）や伝達（対人的モダリティ）が組み込まれている方が、この場合の英文としては価値が高いと考えてよいだろう。

☆☆☆

問 3 次の報道文のなかの文をそれぞれに「認識」「判断・態度」「伝達」の 3 層に分けてください。

日本銀行は 29 日から金融システム安定化の一環として、民間銀行の保有する株の買い取りを始めた。買い取りの対象は保有株式が中核的自己資本の範囲を超える大手行や地方銀行。初日はりそなグループや中央三井信託銀行など数行が数十億円規模で買い取りを要請した模様だ。03 年 9 月までに 1 行あたり 5000 億円を上限に、総額 2 兆円をめどに買い取る計画。ただ、どれだけ活用されるかは未知数だ。日銀への株売却に「難色を示す取引企業も少なくない」（大手行幹部）。

【解答・解説】

**日本銀行は 29 日から金融システム安定化の一環として、民間銀行の保有する株の買い取りを始めた。**

認識 = 命題：日本銀行が 29 日から金融システム安定化の一環として民間銀行の保有する株の買い取りを始めた

対事的モダリティ(判断・態度)：「日本銀行は」(トピック提示)、「～始めた」(断定)

対人的モダリティ(伝達)：なし、あるいは「人間的な伝達はせずに認識・判断だけを伝える」という意図の伝達

報道文や学術文の最大の特徴は「客観性」だとされている<sup>10</sup>。ここでいうところの「客観性」というものを「心」モデルの言葉づかいに翻訳するならば、伝達（対人的モダリティ）の要素を完全に排除して、心の働きのうちの認識・判断の部分だけを言語表現化するということである。

たとえば、文末の「です・ます」という言語表現は読み手に対する「ていねいさ」の伝達（対人的モダリティ）の表現であるので、報道文や学術文には基本的には使えない。問 3 の文でいえば、「日本銀行は 29 日から金融システム安定化の一環として、民間銀行の保有する株の買い取りを始めました。」とは報道文では書けない。なお、ここでは書き言葉としての報道文に限定して論を進めているので、話し言葉での報道表現については別の論になる。

この考え方からいえば、この問 3 における回答は「伝達（対人的モダリティ）はなし」ということになる。

---

<sup>10</sup> 「心と言葉モデル」では「客観」とは「主観」の一部であると見なしている。その事柄がすべての人類にとって普遍なものであると「主観的に判断することが「客観」である。

しかし、それとは別の考え方も、じつは可能である。ここまで見てきたように、日本語の世界では、対事的な認識・表現から対人的な認識・表現に向かおうとする力がつねに強く働いていると考えられる。そうした世界では、対人的な認識や表現が何もなされないという言語表現は、自然なものではない。そしてそうした「特殊な表現」には、何らかの意図を感じ取るのが普通ではないだろうか。

ということは、この文では伝達（対人的モダリティ）表現を取ってなくすことで、「対人的な態度を何も表明しない」＝「客観的である」という意思を読み手側に伝えていると考えることも可能である。すなわち、なにもつけないという「ゼロの表現」には、「人間的な伝達はせずに認識・判断だけを伝える」という伝達（対人的モダリティ）が存在する、と考えるわけだ。

こうした考え方をとれば、英米社会では書籍を音声化したオーディオブックが一般的であるのに対して日本社会ではそうではないこと、英米のビジネスマンが秘書に手紙の口述筆記をさせるのに対して日本のビジネスマンがそうしたことをさせることはほぼ皆無であること、などの理由が見えてくる。英語の世界では、対人的な認識・表現から対事的な認識・表現へ向かおうとする力がつねに強く働いていることから、話し言葉（音声言語）であれ書き言葉であれ、伝達（対人的モダリティ）の言語表現部分をなるべく排除しようとする力が働く。そしてそれを排除した言語表現が良いものであるという一般認識も生まれる。したがって、日本語でいうところの「書き言葉のように話す」ことが、それほど不自然なことではないのである。そのため、書籍を朗読してみたり、手紙文を口頭でつくってみたりすることに対して英語人はそれほど違和感を持たないと考えられる。

それに対して日本語人の場合には、英語人とは逆の方向へのモメンタム、すなわち対事的な認識・表現から対人的な認識・表現に向かおうとする力がつねに強く働いていることから、書かれた文章の中でも報道文や学術文のように伝達（対人的モダリティ）を「ゼロの表現」にしてしまった言語表現をそのまま声に出して読み上げる、つまり「書き言葉のように話すこと」は、非常に不自然に感じられる。このことが日本語の世界ではオーディオブックや口述筆記が一般的ではない最大の理由であると私は考える。

さてここから、この日本語文を英語にしてみる。すでに説明したように、この日本語文には伝達（対人的モダリティ）は表現されていないので、その思考・表現内容をほぼそのまま英語として表現することができる。たとえば、次のようなものが考えられる。

On (month) 29, the Bank of Japan began to purchase shares that are held by Japanese private banks as part of a measure to stabilize the financial system.

このように報道文や学術文では、日本語表現の中の伝達（対人的モダリティ）部分を見つけ出して（削除など）処理する必要がない。その意味では、報道文や学術文は日英翻訳が容易な領域だといってよいだろう。

このように、ある分野について日英翻訳が比較的容易である（あるいは比較的容易でない）領域であることを明確に認識して、その理由について明確かつ具体的に理解しておくことは、私たちが日英翻訳を行ううえで非常に重要である。これによって、無用な考察や作業が大幅に減るからである。

### 買い取りの対象は保有株式が中核的自己資本の範囲を超える大手行や地方銀行。

認識 = 命題： 買い取りの対象は保有株式が中核的自己資本の範囲を超える大手行や地方銀行

対事的モダリティ(判断・態度)：「買い取りの対象は」(トピック提示)、「大手行や地方銀行。」(強い断定を避けようとする判断)

対人的モダリティ(伝達)：なし、あるいは「人間的な伝達はせずに認識・判断だけを伝える」という意図の伝達

この文は日本語の構文として間違っている。この構文では「買い取りの対象は～大手行や地方銀行」となってしまう。日銀は銀行を買い取らない。このような荒っぽくていかげんな文章は新聞や雑誌の文章には頻繁に見られるものなので、プロの読み手、翻訳者としては、十分に気をつけなければならない。

分析としては基本的に前の文で述べたことと同じである。一点、前の文と異なるのは、この文では「大手行や地方銀行。」と「体言止め」が使われていることである。体言止めという表現形式は、「～である」「～だ」に含まれる判断(対事的モダリティ)である「強い断定」が表現されることを避けようとする書き手の判断が含まれている(それが無意識の場合も多いだろう)。これも書き手のある種の判断であるので、体言止め、すなわち「ゼロの文末表現」とは「強い断定を避けようとする判断(対事的モダリティ)」だと私は考える。なお伝達(対人的モダリティ)については前の文と同じである。

さて、この「買い取りの対象は保有株式が中核的自己資本の範囲を超える大手行や地方銀行。」という日本語で表現された日本語人の心の動きを、英語人としての心の動きとして英語で表現する、つまり英語に翻訳するには、どのようにすればよいだろうか。具体的には、次のような Sentence が考えられます。

The central bank plans purchasing securities held by the banks which have the shares in their balance sheets more than Core Tier 1 regulation.

これ以外にも、さまざまな表現の Sentence が考えられることはいうまでもない。

### 初日はりそなグループや中央三井信託銀行など数行が数十億円規模で買い取りを要請した模様だ。

認識 = 命題：初日にりそなグループや中央三井信託銀行など数行が数十億円規模で買い取りを要請した

判断 = 対事的モダリティ：「初日は」(トピック提示)、「模様」(不確実性の提示)、「～だ」(断定の提示)

対人的モダリティ(伝達)：「～だ」(情報の区切りの伝達)

分析としては基本的に前の文で述べたことと同じであるが、前の文との違いは、前の文のように体言止めにするのではなく、「模様だ」と、「だ」止めにしているところである。

「だ」止めは、「～である」止めの親戚筋にあたる表現である。どちらも判断(対事的モダリティ)として「断定」を表す。たとえば、「吾輩は猫である」「天才バカボンのパパなのだ」などがその例である。

「だ」止めと「である」止めの違いのひとつは、断定の程度の強さにある。「だ」止め文に比べると、「である」止め文には更に強い断定の判断(対事的モダリティ)を私は感じる。報道文ではいわゆる「客観性」が指向されるので、書き手の判断を際立たせることを嫌う。そのため、「である」止めではなく、「だ」止めのほうが頻繁に使われる。

「である」「だ」止めには、もうひとつの働きとして「情報の区切りを示す」という働きがある。特に今回のように前の文が体言止めである場合、情報がまだ連続していくという意識が書き手にも読み手に強く生まれているので、「だ」止めを利用し、ここで情報が一区切りだという認識を書き手から読み手への伝達するわけである。

日本語の「だ」止め、「である」止めが持っているこうした伝達（対人的モダリティ）機能は、英語にはそもそも存在しない。したがって、それを英語で表現することはできない。

この日本語で表現された日本語人の心の動きを、翻訳可能な範囲で、英語人としての心の動きとして英語で表現すると、たとえば、次のようになる。

It seems that several banks including Risona Bank Group and The Chuo Mitsui Trust and Banking Company asked BoJ for purchasing shares of some billion yen on the first day.

### 03年9月までに1行あたり5000億円を上限に、総額2兆円をめどに買い取る計画。

認識＝命題：03年9月までに1行あたり5000億円を上限に、総額2兆円をめどに買い取る計画

対事的モダリティ(判断・態度)：なし

対人的モダリティ(伝達)：なし、あるいは「人間的な伝達はせずに認識・判断だけを伝える」という意図の伝達

分析としては基本的に前の前の文（体言止め文）と同じである。ただし、この文も日本語としては欠陥文である。具体的には、「日銀は」が文の最初についていなければならない。それでない、この文のトピックは前の文の「初日は」を引き継ぐことになり、全体として「初日は、～買い取る計画。」というかたちになってしまう。

日本語文での「は」によるトピック表示は、書き手・読み手がそのトピックを既に認識している場合には省略するのが普通である。ただその場合には、基本的には前の文のトピックを引き継ぐ。ここでは、そのルールに違反している。

「日銀は」を加えたうえで、この日本語で表現された日本語人の心の動きを、翻訳可能な範囲で、英語人としての心の動きとして英語で表現すると、たとえば、次のようになる。

BoJ is scheduled to purchase at most the 2 trillion yen shares in total by September 2003 with the maximum amount for one bank being five hundred billion yen.

### ただ、どれだけ活用されるかは未知数だ。

認識＝命題：この計画がどれだけ活用されるか未知数

対事的モダリティ(判断・態度)：「～だ」（断定）

対人的モダリティ(伝達)：「ただ」（条件付け）

分析としては基本的に前の前の文（「だ」止め文）と同じである。この文では、「ただ」という表現が前についている。「ただ」は「ただし」の簡略形で、前述の事柄になんらかの条件がついていることを読み手に認識させるために用いられる伝達（対人的モダリティ）表現である。

日本語の世界では、「ただ」以外にも、文頭におけるさまざまな対人的モダリティ表現が用意されている。「さて」「ところで」「それで」「なお」「ということで」「けれども」「しかし」などなどである。

一方、英語の世界では対人的モダリティ表現そのものの数が少なく、さらには Sentence のはじめに対人的モダリティ表現を配置することは一般的ではない。こうしたことから、「ただ」などに表現される日本語で対人的モダリティを英語として適確に表現することは、ほぼ不可能といってよいだろう。

たとえば、ここでの「ただ」に対しては、和文英訳では But が用いられて、次のような Sentence がつくられるのが一般的だろう。

But it is uncertain how much the scheme is utilized by the banks.

しかしながら、ここでの But は、日本語の「ただ」のように対人的モダリティの表現として機能するのではなく、前述のコトに対する逆説の認識を表す対事的モダリティ表現として機能するのが一般的である。そのため、この But を訳文に加えると日本語の原文には存在しない逆説の対事的モダリティが加えられてしまうことになる。そしてこれを避けるには、なにも加えずに、

It is uncertain how much the scheme is utilized by the banks.

とする方法がある。私としては、こちらのほうが翻訳としての総合的な価値が高まると考えている。

### 日銀への株売却に「難色を示す取引企業も少なくない」（大手行幹部）。

認識＝命題：大手行幹部が日銀への株売却には難色を示す取引企業が少なくないと述べた

対事的モダリティ(判断・態度)：なし

対人的モダリティ(伝達)：なし、あるいは「人間的な伝達はせずに認識・判断だけを伝える」という意図の伝達

報道文特有の非常にトリッキーな表現形式を用いた文であるが、そのトリッキーさに幻惑されてはいけない。まず、ここでの認識（命題）は「大手行幹部が日銀への株売却には難色を示す取引企業が少なくないと述べる」ことである。判断と伝達については、体言止め文と同じだと考えてよいだろう。「難色を示す取引企業も少なくない」（大手行幹部）」を、全体としてひとつの体言だと考えるわけだ。

この日本語文の骨格は「大手行幹部が X X X と述べた」である。その X X X の部分に「日銀への株売却に難色を示す取引企業が少なくない」⇔「少なくない取引企業が日銀への株売却に難色を示す」という別の認識（命題）が埋め込まれている。そしてそれを埋め込んだうえで、会話文体を盛り込み、会話の主体をカッコ表示するという、日本語の基本からすると、じつに無茶苦茶な処理をしたのが、この文である。しかしたとえ

無茶苦茶な処理ではあっても、新聞文章では長きにわたって用いられてきている文形式であることから、すでに近代日本語文として広く認められている。したがって、私たちはそれを受け入れなければならないが、その一方で、これが極めてトリッキーな日本語文であることを明確に認識しておかなければならない。

このトリッキーな日本語で表現された日本語人の心の動きを、翻訳可能な範囲で英語人としての心の動きとして英語で表現するには、まずそのトリッキーな要素を取り除いてやる必要がある。そのためには、たとえば以下のような別の日本語文に書き換える作業から始めなければならない。

大手行幹部は次のように述べた。「少なくない取引企業が日銀への株売却に難色を示している。」

こうしてから英語表現にすると、たとえば、次のようになります。

A major bank manager said, “not a few business partners would not like our selling of their stocks to BoJ.”

ただ、日本語の報道文でのカッコの使い方では英語での直接話法のように本当に発言されたまをそのまま記述するという意識はそれほど高くない。したがって、ここでも「難色を示す取引企業も少なくない」と本当に銀行幹部がそのままのかたちで述べたかといえば、おそらくそんなことはないだろう。そもそも会話では「少なくない」という言い方はしない。したがって、ここでの英語は必ず直接話法でなければならない、ということはない。次のように間接話法で表現することも十分に可能であるし、文脈全体から判断すれば、そのほうが翻訳としての価値が改善されると私ならば考える。

There are a considerable number of business partners who would not like the selling of their stocks to BoJ, according to major bank manager’s comment.

☆☆☆

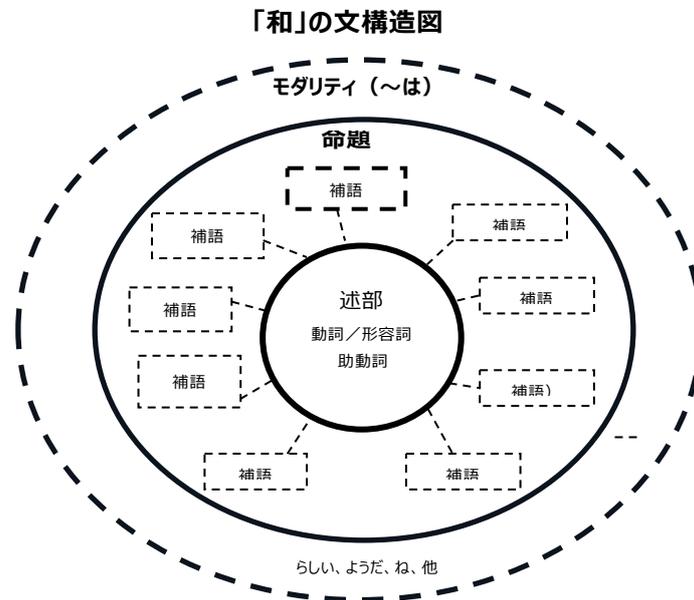
# 2 章

## 日本語の文の 3 つの構造

### ——和・漢・洋

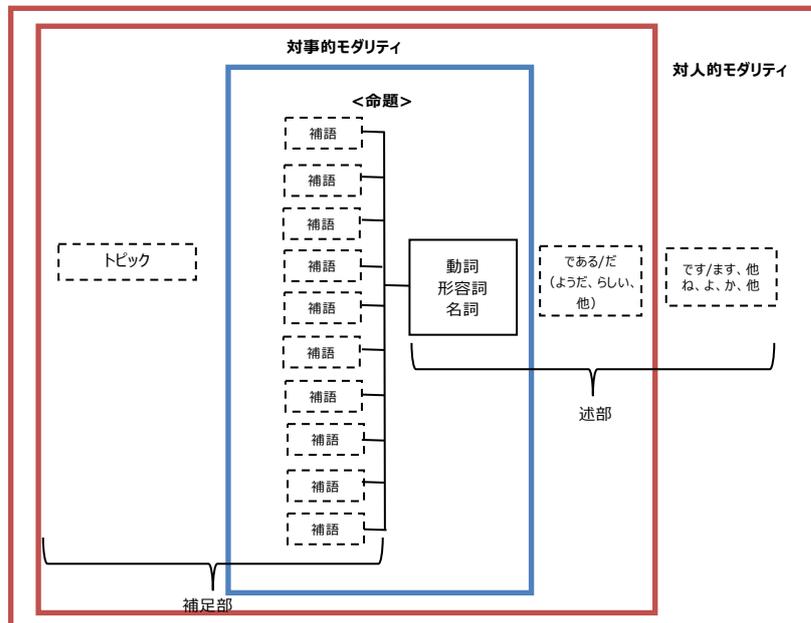
#### 【要約】

- 「文」は「単文」(原子命題文)と「複文」(分子命題文)に分けることができる。「単文」は思考のまとまりである原子命題をひとつだけ含んでいる。複文は原子命題をふたつ以上含む文である。いくつかの単文を適切な方法を用いて結合させると複文となる。単文をどのように結合させるかによって複文の性質が決まる。
- 「心と言葉のグローバル日本語文法」では、和・漢・洋の 3 本の脚に対してそれぞれに異なる文法構造を設定している。これは実践という観点からみると、現代日本語の読み書きをするうえでは非常に役に立つものである。
- 「和」の文構造では話し手/書き手の視点はその目から正面に向かっている。そして聞き手/読み手もまた自分が話し手/書き手のすぐ横にいるとイメージしており、その視点は話し手/書き手と同じ方向をみている。これが「和」の日本語における「わかる」(わかちあう)ということである。



- 「漢」の日本語とは日本語が受容してきた中国語の語彙、構文、思考方法のことである。明治までの日本での公的文体は漢文だった。それと並行していわゆる漢文訓読体も発展してそれが「準」公的文体として用いられた。この漢文訓読体が明治以降につくられた法律文体や学術文体のベースとなっている。

「漢」の文構造図



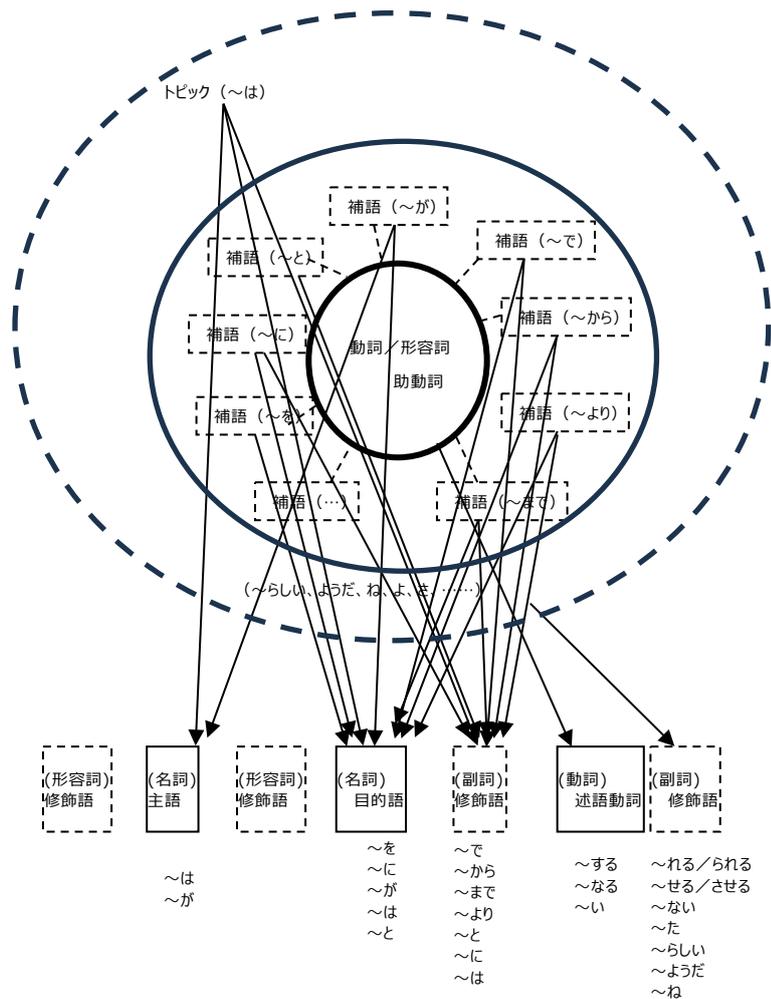
- 目今の「見え」の世界をそのまま図にしたいだけの「和」の日本語の構文とは異なり、「漢」の日本語の構文では分析的な思考が働いている。言い換えると「漢」の日本語の構文は文としての構造化がきっちりとなされている。
- 「漢」の日本語の文の構造は大きく分けて「述部」と「補足部」に分けることができる。「述部」は、中核となる動詞/形容詞/名詞とそれを補足する各種モダリティ要素から構成される部分である。「補足部」は、「補語プラス格助詞」要素と「トピック」要素から構成される部分である。
- 補足部は文にとって任意の要素である。ゆえにそれがなくとも文になる。具体的にいえば、「～は、～が、～を、～に」などの要素がなくとも文は成立する。
- 「漢」の日本語の世界を眺める視点は、話し手/書き手の目から離れて天に浮かんでいる。こうした「客観的」視点からは、話し手/書き手の心の動きに寄り添ったように生々しく表現することはない。あるいはそれをすることができない。あたたかで情感豊かな「和」の日本語の世界とは異なり、「漢」の日本語の世界はクールであり理知的である。
- 「洋」の日本語とは明治以降に日本語が受容してきた西欧語の語彙および構文、思考方法のことである。

### 「洋」の文構造

修飾語	主語	修飾語	目的語	修飾語	述語動詞	修飾語
	～は ～が		～を ～に ～が ～は ～	～で ～から ～まで ～より ～と ～に ～は	～する ～なる ～い 他	～らしい ～ようだ ～ね 他

- 「洋」の文構造について私は「和」の文構造から「洋」の文構造へと変形されたという考え方が成り立つと考えている。

### 「和」の文構造から「洋」の文構造へ



- 「洋」の文構造と「和」「漢」の文構造との本質的な違いは、まず「主語」(Subject の翻訳語)、「目的語」(Object の翻訳語)という西欧語の文法概念が最初から用意されている点にある。
- 「洋」の文構造は、当初はフィクション(虚構)であったが、日本社会(なかでも学問の世界)の急激な西欧化のなかで一種のリアリティ(実在)へと変化していった。一部の日本人(なかでも学者たち)が「洋」の文構造にあわせたかたちで実際に日本語の文章を書き始め、そしてそれが西欧化の道を歩み続ける日本社会において価値あるものとして受け容れられた。
- ただしそれらの日本語の文章は日本語の生来の性質を無視したものであったことから必然的に言語として歪んでおり、クオリティも低劣である。だがそのようにわかりくい悪文であることこそが「洋」の文構造の日本語文章にとっての高評価の源泉ともなっている。

☆☆☆

ここからは日本語の実際の表現のあり方としての「文」についてみていくことにする。なお当然のことながら「文」表現のなかにはここまでみてきた命題/叙述内容(認識・思考)、対事的モダリティ(判断・態度)、对人的モダリティ(伝達)という3つの機能が一体として含まれている。

## 単文と複文

まず「文」は「単文」(原子命題文)と「複文」(分子命題文)に分けることができる。「単文」は思考のまとまりである原子命題をひとつだけ含んでいる。複文は原子命題をふたつ以上含む文である。

いくつかの単文を適切な方法を用いて結合させると複文となる。単文をどのように結合させるかによって複文の性質が決まる。これは原子の結合のあり方で分子の性質が決まるのと同じことである。

## 和・漢・洋に対してそれぞれ異なる文法構造を設定

前の「現代日本語三脚論」の項において私は現代日本語が和・漢・洋の3本の脚に支えられた言語であることを説明し、そのうちの一脚でも欠けてしまうと現代日本語として成り立たなくなると述べた。さらには現代日本語のように三脚によって支えられている複合言語は世界でほかに類をみないと述べた。

現代日本語とはこのように複雑かつユニークな言語であるがゆえに、現代日本語の文を考察する場合には、複雑でユニークなアプローチが必要となると私は考える。そのため「心と言葉のグローバル日本語文法」では、和・漢・洋の3本の脚に対してそれぞれ異なる文法構造を設定している。

こうしたアプローチは言語の研究方法として一般的なものではないだろう。だが実践という観点からみると、現代日本語の読み書きをするうえでは非常に役に立つものである。実際に役に立つ理論こそ良い理論だと、私は考えている。

以下では、和・漢・洋のそれぞれの文の構造について説明する。